

二〇一九年度

中古文学会春季大会 シンポジウム・研究発表要旨

期日 五月十八日(土)・十九日(日)  
会場 共立女子大学

第一日 五月十八日（土）

大会企画 **シンポジウム**

『伊勢物語』を考え直す』

趣意説明

パネリスト紹介・司会

パネリスト報告

〈報告1〉

〈報告2〉

〈報告3〉

〈報告4〉

〔趣意〕

『古今集』によって象徴される国風文化としての平安朝文学の出現は、従来、菅原道真の遣唐使中断の過大評価などにもとづいて、中国文化の影響から抜け出した日本文化成熟の成果として、文化史、文学史の必然的な展開と見なされてきた。

しかし、その文化・文芸の場である宮廷では、その間、革命的ともいえる異常な皇統交替が起こっていた。仁明天皇の後、藤原氏に支えられ盤石の感あつた文徳、清和と続いた皇統は、次の陽成天皇の17歳での退位という異常事態によって断絶する。替わって即位したのは、陽成天皇には祖父にあたる文徳天皇の弟の時康親王、55歳の光孝天皇であつた。それはたんなる天皇の代替わりではなく、皇統の交替であり、両皇統間の確執の一端は文献にも記されている。

東京大学 田村 隆  
東京大学 田村 隆

九州大学名誉教授 今 西 祐一郎  
元帝京大学教授・東京学芸大学名誉教授 木 村 茂 光  
帝塚山大学「非」 内 田 美由紀  
法政大学 加 藤 昌 嘉

この皇統交替に関して、歴史学ではつとにその異常さが指摘され、論じられてきた。それに対し、国文学研究ではどうであつたか。この異常な皇統交替のさなかに享受されていたのが『伊勢物語』であり、異常な皇統交替により誕生した宇多天皇、醍醐天皇によってなされたのが『古今集』の編纂であつた。しかし、『古今集』研究、『伊勢物語』研究において、その点に光を当てた研究は乏しく、『伊勢物語』は「珠玉の歌物語」であり、『古今集』は「延喜聖代」における文運隆盛の証であるという見方から抜け切れていないように思われる。

本シンポジウムでは『伊勢物語』に焦点を絞って、後人注記や『伊勢物語』という題号を含めた『伊勢物語』生成の過程を、陽成天皇から光孝天皇への皇統交替という背景に絡めて考え直してみたい。『伊勢物語』および日本古代史の研究者計四名を登壇者に迎えて、パネルディスカッションを行う。

第二日 五月十九日(日)

研究発表 午前の部

フロラ・ハリスによる英訳『土佐日記』について

日本社会事業大学 大野 ロベルト

海外における日本研究は十九世紀後半の開国と同時に出発し、古典文学の本格的な紹介も、この時期に始まっている。研究の進展をとくにその初期において支えたのは、原典ではなく翻訳されたテキストであった。日記文学、紀行文学の嚆矢と位置づけられる紀貫之の『土佐日記』もその例にもれず、明治以降、アストン、ポーター、サージェント、マイナー、マツカラなどの研究者によって繰り返し英訳・紹介がなされてきた。しかしながら、英訳として最も古く、なおかつ完訳であるフロラ・ベスト・ハリス(Flora Best Harris、一八五〇～一九〇九)による『土佐日記』の翻訳については、詳しい内容や成立事情はまったくと言ってよいほど明らかにされていないのが現状であり、英語圏の研究書でも、しばしばその存在が見落とされているほどである。本報告では、一八九二年と一九一〇年の二度にわたって出版されたハリス訳『土佐日記』について、その書誌や成立事情を明らかにすると共に、ハリスの訳業が国内外で受けた評価やその背景について考察を加えることで、今後『土佐日記』の海外における受容の過程を、いわゆるジャパノロジーとの関連も含めて、さらに深く探求するための足がかりとしたい。

『更級日記』冒頭の薬師仏と『源氏物語』

国立国語研究所(非常勤研究員) 西原 志保

『更級日記』冒頭で作者は、上京し物語を読むことを願い、「等身に薬師仏を造」る(新全集、299頁)。この薬師仏については、絵のようなものであったとも言われ、また後半で夢に見る阿弥陀如来との関係など、様々に論じられる。

本発表では、この薬師仏に、京へ行き、物語を読みたいという自らの祈りが込められていること、また「等身」であることに注目したい。『源氏物語』において、薫が大君の死後「むかしおぼゆる人形をもつくり、絵にもかきとりて、おこなひ侍らむとなん」(新大系、宿木、9巻88頁)と思い、自らの大君への執着を癒そうとする場面がある。この場面と、自らの執着や欲望を癒すためのものとして仏像のようなものが希求されることが、共通すると考えるからである。また、『更級日記』作者は浮舟に強い憧れを抱いているが、大君の「人形」「形代」として登場したのが浮舟である。そして自らの欲望を託す対象であるこの薬師仏は、「等身」であることで、自己像や自らの分身・人形のような機能も想起させる。

そこで本発表では、この薬師仏を自画像、あるいは人形のようなものとして位置づけるとともに、浮舟への憧れと関連つけて考察したい。そうすることによって、物語(フィクション)への憧れと、日記という自己を語る行為が行われることとの関係の上に、『更級日記』冒頭の「等身」の薬師仏を位置づけ、その意味を考察する。

『古今和歌六帖』の現存諸本はいずれも、約四五〇〇首の和歌を二五の大項目（大項目という呼称は発表者が便宜的に用いたもの）に分け、さらにそれを五〇〇余の項目に分類・配列するかたちをとる。こうした項目別の歌集構成こそ、『古今和歌六帖』の最大の特徴といえよう。本発表では、漢籍の類書や辞書、また『古今集』などの勅撰集の分類法との比較を通して、『古今和歌六帖』における和歌分類・配列のあり方に検討を加え、同集独自の歌集構成の方法・論理を考察したい。

なお、二五の大項目は、「春・夏・秋・冬・天・山・田・野・都・田舎・宅・人・仏事・水・恋・祝・別・雑思・服飾・色・錦綾・草・虫・木・鳥」から成るが、興味深いことに、第一帖冒頭にみえる「古今和歌六帖題目録」には、「春・夏・秋・冬」のさらなる上位概念として「歳時部」が示されている。題目録のなかで「部」がみえるのは当該箇所のみであり、この「部」の位置づけをいかに捉えるかは、『古今和歌六帖』の構成を考えるうえできわめて重要であると考えられる。

本発表ではこの「部」の問題を念頭においたうえで、和歌の具体例に即しながら『古今和歌六帖』の大項目の構成のあり方に再検討を加え、同集の構成の方法を明らかにしたい。

空海（七七四〜八三五）は、その生涯において、実に多くの「文」を残した人物である。本発表では、その中でも空海の詩文を収める『遍照發揮性靈集』（真済編 十巻。うち巻八〜巻十は済蓮編『統遍照發揮性靈集補闕抄』による補）を中心に取りあげ、空海がいかなる「文」を書き、また、空海が「文」というものをいかに捉え、いかなる思考をめぐらしていたのかを考察する。

空海は、唐への留学を果たし、密蔵の奥義を学び取るとともに、「文」をめぐるさまざまな情報入手して帰国した。『遍照發揮性靈集』所収の文からは、そうした空海の軌跡をたどることができるばかりでなく、そこにいかなる葛藤や創意があったのかをみることができる。また空海は帰国後、天皇や官人、仏者や弟子たちなど、さまざまな人びとと「文」を通じてつながりを持ったことが知られる。そしてこれらの「文」には、空海にとって「文」とは何かという、いわば空海の「文」論がしばしば披瀝されている。例えば、渡唐して梵字をも習得した空海は、真言の教えを（梵字ならぬ）「文」で伝えることの限界を説く一方、「文」の「不朽」を称えたり、詩文を作り贈答することの感動を述べたりもしている。

発表では、「文」をめぐる空海の実践と思考のありようを検討しながら、平安初期という時代の文学において空海が存在と行動が与えたインパクトについても考えてみたい。

渡殿の戸口の紫の上

—「薄雲」巻における中将の君を介した歌をめぐって—

湘北短期大学「非」 佐藤 洋美

『源氏物語』「薄雲」巻、大堰に向かう光源氏は、後を追う明石の姫君に催馬楽「桜人」の一節を用いて「明日帰り来む」と口にするが、それを聞いた紫の上は「渡殿の戸口」に「待ちかけ」、女房である中将の君を介してその「桜人」の詩句を用いた皮肉な歌を詠みかけている。従来、当該場面は紫の上が明石の君への嫉妬を収束させていく過程のなかで位置付けられてきたが、ここで、「渡殿の戸口」という場所で、しかもわざわざ女房に歌を託して詠みかける紫の上のふるまいからはどのような意味を読みとることができのだろうか。

諸注釈には、「渡殿の戸口」に「待ちかけ」ている人物について、紫の上と中将の君の両説が存在するが、本発表では、まず「待ちかく」の主体について検討を加え、紫の上が妥当であることを明らかにする。また、「渡殿」とは殿舎間をつなぐ建物であり、女房の局になることや、垣間見の場として描かれることなどがすでに指摘されているが、「渡殿の戸口」という場所の特異性をあらためて問い直し、紫の上がそこで歌を詠みかける意義について考えていきたい。そのうえで、そのような場所で、紫の上が直接詠みかけるのではなく、光源氏の召人でもある中将の君に歌わせる理由について考察したい。当該場面は、催馬楽「桜人」を基調として展開されるが、そこで繰り広げられている場面の様相を分析することによって、姫君を譲渡された後の紫の上のあり方を明らかにする。

手紙にみえる柏木の情念

—『源氏物語』「胡蝶」巻「いと細く小さく結びたる」を端緒として—

國學院大学「院」 小菅 あすか

「胡蝶」巻、玉鬘のもとへ求婚者から手紙が寄せられる。光源氏はそのなかでも「いと細く小さく結びたる」手紙に関心を示す。「思ふとも君は知らじなわきかへり岩漏る水に色し見えねば」と詠まれているこの手紙は、玉鬘へ思いを寄せる柏木が送ったものであった。

これまで「いと細く小さく結びたる」形式は、懸想文の定型である結び文と、この手紙を「結ばほれたる」と表した光源氏の言とを掛けることで、求婚者としての心情を表していると解されてきた。しかし、結び文の有り様がこのまで具体的に描写されているのは、本場面を除いては近江の君から弘徽殿女御へ送られた手紙のみである。では、なぜこうした特異ともとれる形式を柏木は用いたのだろうか。

従来、「結ぶ」という行為には、物だけではなく同時に動作主の思いをも繋ぎ合わせる機能があるとされてきた。柏木の手紙は結び文という形式を持つことで、情念とも呼ぶべき強い思いを繋ぎ留めていた。しかし、その手紙は玉鬘ではなく光源氏によって開封されてしまう。つまり、本来玉鬘に届くべき情念が光源氏によって遮断されてしまったのである。

本発表では、柏木にとつての「手紙を結ぶ」行為を検討した上で、それによって生まれた形式がいかに手紙で詠まれた歌と連関し、柏木の情念を表現しているのかを明らかにするとともに、この手紙を後の女三の宮との物語へ繋がる端緒として位置づけていく。

『源氏物語』には、同一の語が、さまざまな文脈や状況によって、多様な意味・内容で何度も繰り返される手法があることが知られている。それを「語脈」という。本発表では、その「語脈」が有効に用いられている一例として、「めやすし」という語とそれによってつながる物語を追ってみたいと考えている。

「めやすし」の語脈について指摘した研究は管見に入らないが、この形容詞は、『源氏物語』では一〇五例を数える。また、その対象に着目すると、取り立てて後見を持たない女君に顕著に用いられる傾向が目につく。この語は、寄り添わない身の上の女君にまつわる物語を読み解くキーワードとして重要だと思われる。

今回は、「めやすし」の語が集中する物語の中でも、再婚する女君として共通項を持つ、落葉宮と真木柱を中心として論じたい。彼女たちは、朱雀院が女三宮の婿選びの際に口にした、生き難い女性の人生をなぞった二人だと言ってよい。

本発表では、まずこの二人の共通点を挙げ、二人の運命が入れ替わることもあり得たほどであること、互いに補完する物語として読み得ることを確認し、論を進める。次に、落葉宮と夕霧の事件で「めやすし」が繰り返されるさまと、真木柱の人生に対する玉鬘の「めやすし」という言説とをそれぞれ読み解く。これらを検討することで、後見人の決めたわけではない再婚によって苦悩した女君の人生に対する、物語の一つの見解を垣間見ることが目標とする。

松村博司氏が『栄花物語』諸本を、古本系、流布本系、異本系に分類した後、久保木秀夫氏によって西本願寺本の位置づけが見直された。さらに顕昭説証本系の伝本である学習院大学文学部所蔵本(以下、学習院本と略称する)が発見された後、加藤静子氏による続編の学習院本研究、小島明子氏による富岡本の検討が為されてきた。

また、歴史叙述に関しては先学によって議論されてきたが、梅沢本に立脚している。

さて、学習院本を閲すると全四〇巻にわたり膨大な異同が認められる。異同の傾向の特徴は、普通系諸本の独自本文をほぼ有する点である。例えば、西本願寺本(流布本系)の特色である巻一五の願文、出所不明の本文とされたきた巻八の富岡甲本(異本系の書き入れ、巻二五の書き入れとして見られる兼好法師真跡本の一節、西本願寺本及び陽明文庫本(古本系)一種)に見られる巻二〇の末尾の部分などである。

もちろん学習院本は顕昭説証本そのものではなく室町期の書写であり、同系の古筆切を通覧しても、鎌倉末期から南北朝期頃のものが残存する程度である。誤写が想定される部分や明らかな誤り、意味不明な記述もある。だが、いっぽうで和歌の異伝資料や普通本系諸本とは異なる記述も看取されるのだ。本発表では、学習院本の位相を見定めながら、藤原道長とその子女頼通、寛子、嬉子に関わる記事の検討を通じて、それぞれの諸本の論理を析出していくことを目的とする。



